

一歩進んでコミュニケーションを



谷口 竜王

千葉大学大学院工学研究科共生応用化学専攻
[263-8522] 千葉市稲毛区弥生町 1-33
准教授, 博士 (工学).
専門は高分子合成, 界面化学.
taniguchi@faculty.chiba-u.jp
<http://chem.tf.chiba-u.jp/gacb03/index.html>

年度末に男女共同参画委員会の先生方から本コーナーへの寄稿を依頼され、原稿の執筆が学部4年生の研究室配属の時期と重なった。新年度のスタートにあたり、研究室における女子学生の比率を計算したところ、学科比率(約20%)よりも高い30%であった。10年ほど前であれば就職支援などで不安になったかもしれないが、2年前に就職担当を務めた際に内定獲得状況に男女格差はなく、就職面では改善が進んでいるように思う。しかし、夫婦共働きで二人の子供を抱えて慌ただしい毎日を過ごしている身からすると、女性のほうが仕事と私事の両立、いわゆるワーク・ライフ・バランスで未だに多くの負担を強いられているように思われる。私は決して理想的な家庭人ではないが、ここでは一男性教員としての育児へのかかわり方を雑感として述べることにする。

私が所属する学科では、子育て中の男性教員が勝手に「イクメンズ」を立ち上げている。私に第1子となる長男が生まれたときに、先輩教員から子育ての一助として「子供の病気百科」をプレゼントされた。これは思いのほか、役立った。というのは、子供はウィルス性胃腸炎や手足口病など次から次にいろんな病気に罹るうえ、急に熱が上がったりして具合が悪くなるのが度々あるからである。ネットで検索すれば必要な情報を得ることはできるが、写真入りのわかりやすい本が手元にあると安心だった。また、身長や体重など標準的な成長過程にあるか資料になったうえ、食物アレルギーの治療法などの参考にもなった。本の価値はもちろんであるが、このような本を贈っていただいた行為自体が私にはありがたく、私の次に子供が生まれた教員に同じような本を贈ったところ、学科内でリレー式に本を贈る習慣ができた。子供のことを話題にすると自分自身が親ばかりではないかと少し気恥ずかしい気分になることもあるが、職場で同じような境遇にある教員仲間と気兼ねなく話す関係が築けているように思う。

第2子の長女については、多少なりとも要領がわかっているので比較的苦労は少ないが、これまで何度も駆けつけてくれた妻の両親が高齢となり、体調が必ずしも良くないので、個ではなく公のサポートが必要になると考えている。幸いなことに、自治体にはファミリーサポート制度、さらに本学には研究・教育などの職務と育児・介護などの両立を支援するための両立支援企画室がある。先日ベビーシッターなどの相談のため初めて企画室を訪ねたところ、さまざまな支援制度が拡充していることだけでなく、研究室活動のため女性教員は民間企業の女性社員よりも育児期間が短い傾向にあることなども知った。こちらから求めなければ情報は得られないわけで、これまでの姿勢と無知を恥じ入るばかりである。

子供と一緒に過ごしていると、これまで気にすることもなかった移動の不便さ、自動車や自転車の往來の危険性などが意外にも多く、生活リズムは子供のペースに合わせることになる。実際に遭遇する状況に応じてその都度どのように対処するか判断するしかないことばかりであるが、公私とも日頃のコミュニケーションが重要であると思う。子供の具合が悪くなりそうになれば、研究室にいち早く連絡しているが、先生方や学生に不便をかけていることに申し訳なさを感じるとともに、柔軟に対応してもらっていることに感謝している。また、保育所での送迎時に着替えの交換や連絡帳の確認で一緒になる男性は無愛想でぎこちなく見えるが、世間話を重ねていくうちに同じようなことで苦労していることへの共感をもてるようになった。夫婦二人で仕事と子育てを完璧に両立することは難しく、どこかで折り合いをつけなければならないが、子供をもつ親になって親の苦労も少しずつわかるようになってきた。子供とともに自分自身が成長することを自らに期待しながら、バランス良く仕事と子育てに向き合いたい。